

進級が中学生の学校生活の認識に与える影響

小 山 尚 輝*・高 橋 知 己**

(令和6年10月3日受付；令和6年10月17日受理)

要 旨

本稿では、上越教育大学いじめ・生徒指導研究研修センターが行ったA県X市での2年間でのべ約1,160名の生活アンケートの結果を基に、当該地域の生徒の実態に関する分析を行った。2年間の回答の割合の差より変動の大きかった増加の10項目と減少の10項目を比較したところ、将来や学校への行きたくさに関する項目が大きく変動していることがわかった。将来の希望する進路に関する項目では、A県X市では学年が上がるにつれて地元から離れていく傾向があること、勉強や進路に関することについては進級しても悩みを抱えている生徒の割合がやや増加していることが確認された。進学意識については2年生から3年生に進級したタイミングで変化し、高まっている様子が見られた。悩み全般に関する質問項目では男子よりも女子のほうが悩んでいる割合が多く、なかでも中学2年生の女子生徒は悩みを抱えやすい傾向がみられた。中学2年生女子は1年生から2年生への進級で友人関係や自分の見た目に関する悩みが増加し、2年生から3年生への進級でそれらの悩みは減少していた。家族との関係性については近年の親子関係に関する研究と同様に、どの学年、性別においても肯定的な回答が多く、良好な家族関係が築けている可能性が示唆された。設問全体を通して「わからない」を選択する生徒の割合は進級に伴って減少し、自身の学校生活上での内面的な部分を言語化できるようになっていることが示唆された。

KEY WORDS

生活アンケート school life questionnaire 不登校 school refusal 一人一台端末 one device per person
進級 promotion 性差 gender difference

1 問題と目的

1. 1 不登校等学校不適応の現状

文部科学省が発表している「令和4年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」によると、不登校児童生徒数は10年間増加し続けており、令和4年度は過去最多の299,048人（うち中学生は193,936人）であった⁽¹⁾。また、学年別の不登校児童生徒数の比較によると、中学校入学以降でその人数は急激に増え、中学2年生及び3年生で不登校生徒数は最大となっている。さらに、同調査では不登校の要因についての調査も行っており、それによると不登校の主たる要因として「無気力、不安」を挙げている児童生徒が半数以上いることが分かっている。こうした現状に対応するため、令和5年3月に「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策」（COCOLOプラン）が文部科学省によって取りまとめられた。本プランの中では不登校対策に関する方針等について、『生徒指導提要（令和4年）』の中で示された生徒指導の3類⁽²⁾に沿った形で、大きく3つのテーマが示されている⁽³⁾。さらに、こうした取り組みの緊急強化を図るため、同年10月には「不登校・いじめ緊急対策パッケージ」⁽⁴⁾が発出された。これらの中で示されているように、不登校児童生徒の学びの確保と共に、子どもたちの不安や悩みを早期に解消し、安心して過ごせる学校づくりを行うことが求められている。

本研究ではCOCOLOプランの3つのテーマのうち2つ目にあたる、「心の小さなSOSを見逃さず、「チーム学校」で支援します。」に関する活動として、一人一台端末を活用した生活アンケートの結果からみえる児童生徒の心身の変化に着目した。学校に登校しているすべての児童生徒が共通して抱きやすい不安感や悩みについて明らかにすることが、児童生徒が安心して過ごせる学校づくりにつながると考える。

1. 2 研究の目的

上越教育大学いじめ・生徒指導研究研修センター¹⁾はA県の児童生徒を対象に、タブレットを活用した学校生活に

*上越教育大学（専門職学位課程） **いじめ・生徒指導研究研修センター

関する生活アンケートを行っている。GIGAスクール構想が進んだことで児童生徒は一人一台端末の操作に慣れてきている。アンケートについてもタブレット上で回答する形式のものが増えており、紙で行うよりもスムーズに配布や収集を行うことができるようになった。端末操作に慣れている若者は手書きよりも文字入力の方がストレスを感じにくいという佐野ら（2011）⁵⁾の指摘もあることから同センターではタブレット活用したアンケートを推進している。実際には2023年にA県の小中学生4,590名を、2024年はA県の小中学生合わせて6,072名（2024年8月回収時点）を対象としてアンケートを実施している。本研究では生活アンケートの中から、A県のX市の中学生に着目し、2023年に中学1、2年生だった590名と、2024年に中学2、3年生になった570名のアンケート結果を分析対象とした。2年間のアンケート結果の分析から、進級に伴って生徒の学校生活に対する認識はどのように変化するかということについて分析し、その結果を実際の生徒指導場面に活用する可能性を検討することを目的とする。

2 調査方法

2. 1 調査対象者

本研究では、A県X市の中学校7校に通う中学生のべ1,186名（2023年598名、2024年588名）を対象とする。回答は無記名であり個人を特定できない形で収集しており倫理的に問題はない。実施に際しては、X市教育委員会並びに同市の所属校長の了承を得ている。分析にあたっては性別ごとの比較を行うため、性別に関する質問項目において「男子」及び「女子」と回答したものを分析対象とし、性別について「その他」を選択したものあるいは無回答だったものについて、今回は分析対象から除くこととした。そのため、分析を行った対象者は、2年間でのべ1,160名（2023年590名、2024年570名）であった。各学年及び性別の内訳は、2023年〔1年生：304名（男子：167名、女子：137名）、2年生：286名（男子：152名、女子：134名）〕、2024年〔2年生：283名（男子：158名、女子：125名）、3年生：287名（男子：150名、女子：137名）〕であった。

2. 2 調査内容

アンケートでは、勉強や授業、友人関係、部活動等の学校生活に関する項目、家庭環境や家族等に関する悩みなどの学校生活以外の項目、いじめに関する項目などおよそ20問の質問への回答を求めた。質問内容については上越教育大学いじめ・生徒指導研究研修センターがX市教育委員会及びA県教育委員会との打ち合わせを基に作成している。なお本研究では1年目はGoogle Forms、2年目は独自に開発したアプリケーションを用いて回答を求めた。なお回答についてはExcelによってデータを整理・集計を行った。

3 結果と考察

3. 1 結果全体の概要

得られたアンケートの回答を学年、性別で分けたのちに各回答数を求めそれらがその集団における何%にあたるのかを求めた。以下ではそれらを表やグラフにしたものを示した。なお、本稿で示した結果の一部は筆者ら（小山・高橋）が日本生徒指導学会第25回鳴門大会で発表を行う予定である⁶⁾。

表1では2023年の結果と2024年の結果を比較した際に、選択する割合が増えた上位10項目について示した。この表から、中学2年生の女子の項目と男子および中学3年生の女子を比較した際に、増加している10項目について、中学2年生女子の上位10項目は、否定的あるいは消極的なものになっている。さらに、変動の割合も中学2年生女子は男子及び中学3年生女子より大きく、10位の項目であっても9.8%上昇しており、同年代の男子と比較すると2倍以上の変動率であることが分かる。このような結果より、中1から中2に上がった際的女子に関して認識の変化が多く起きている可能性が考えられる。勉強の成績などそれぞれの種別の中で変動率が多い項目についても各学年において生徒指導、進路指導の際に意識をしておかなければいけない点であると指摘することができる。自身に当てはまるものを選択する質問の中で「学校に行きたくない」を選択する生徒や学校に行きたくないなあと思うことはあるかという問いに対して「よくある」と回答する生徒が全体的に多くなっていることも懸念事項としてあげられる。

表2では2023年の結果と2024年の結果を比較した際に選択する割合の減少した減少率の高い上位10項目を示した。担任がいじめを注意するかどうかの項目について「分からない」を選択する生徒が減少していることがよくわかる。また、表1と合わせてみた際に、担任が注意すると評価している生徒の割合が増えたことの表れであることが分か

る。また、下位10項目の項目名を見てみると「わからない」という文字が多く出ている。前年に「分からない」としていたものが自身の中に言語化できるようになっている生徒が増えていることの表れであると捉えることができるため、これらは良い面であるといえる。さらに、男女比較した際に、若干ではあるが女子のほうが男子よりも変動率が大きいことが読み取れる。

さらに表1と表2を両方見た際に、将来の生活や進路に関する項目が多く出てきている。それだけ中学生にとって将来や進路に関する考え方が変化しやすいものであるということであると考えられる。その他の項目も含め、実際にどの項目がどの程度減少及び増加したのかについては次節以降で示す。

表1 増加した上位10項目

増加変動率上位10項目（2023年度から2024年度の間で増えた項目）			
新中学2年生		新中学3年生	
男子	女子	男子	女子
学校に行きたくない （↑21.7%）	友達という時に嫌な思い -たまにある（↑16.4%）	担任はいじめを -厳しく注意する（↑18.5%）	悩み-勉強の成績（↑12.1%）
一人になりたいこと -あまりない（12.7%）	学校に行きたくない -よくある（↑16.4%）	学校に行きたくない （↑16.2%）	あなたをわかってくれる人 -家族（↑10.6%）
悩み-将来（↑9.1%）	立ちくらみがする （↑13.1%）	担任-いつもわかってくれる （↑9.8%）	悩み-将来（↑8.7%）
悩み-勉強の成績（↑9.0%）	悩み-将来（↑12.7%）	朝、ご飯を食べたくない （↑8.8%）	担任-いつもわかってくれる （↑7.9%）
担任はいじめを厳しく注意し ている（↑7.0%）	将来の生活-県内の他の市町 村（↑12.6%）	将来の進学-大学（↑8.2%）	将来の生活-県内の他の市町 村（↑7.5%）
学校に行きたくない -たまにある（↑5.9%）	頑張っているなあと思うこと はあまりない（↑12.5%）	疲れやすい（↑7.2%）	朝、ご飯を食べたくない （↑7.1%）
将来の進学-高校（↑4.9%）	学校に行きたくない （↑12.1%）	悩み-勉強の成績（↑7.2%）	将来の生活-県外（↑7.0%）
将来の生活-まだわからない （↑4.8%）	悩み-友達（↑12.0%）	あなたをわかってくれる人 -家族（↑7.1%）	将来の進学-高校（↑6.4%）
家にいると-楽しい時もある （↑4.7%）	一人になりたいこと -よくある（↑10.3%）	将来の生活-県内の他の市町 村（↑6.9%）	将来の進学-大学（↑5.4%）
将来の生活-県内の他の市町 村（↑4.6%）	何もないのにイライラする （↑9.8%）	悩み-将来（↑6.5%）	学校に行きたくない -よくある（↑4.7%）

表2 減少した上位10項目

減少変動率上位10項目（2023年度から2024年度の間で減った項目）			
新中学2年生		新中学3年生	
男子	女子	男子	女子
担任はいじめを注意するか -分からない（↓11.3%）	学校に行きたくないなあ -あまりない（↓14.5%）	担任はいじめを注意するか -分からない（↓18.8%）	担任はいじめを注意するか -分からない（↓10.3%）
一人になりたいと思う -たまにある（↓10.1%）	悩み-分からない（↓13.9%）	将来の進学-まだよくわから ない（↓11.5%）	悩み-体の健康（↓9.1%）
担任-わかってくれる時もある （↓8.4%）	一人になりたいと思う -たまにある（↓12.1%）	将来の生活-わからない （↓8.0%）	担任は分かってくれる -わからない（↓7.8%）
すぐ不安になる（↓7.6%）	将来の生活-今住んでいる所 （↓11.8%）	悩み-分からない（↓6.4%）	なんとなく大声を出したい （↓7.7%）
将来の生活-今住んでいる所 （↓7.4%）	友達という時に嫌な思い -わからない（↓10.4%）	学校に行きたくないなあ -たまにある（↓5.5%）	将来の生活-今住んでいる所 （↓7.5%）
疲れやすい（↓7.1%）	悩み-家族や家のこと （↓9.0%）	頑張っているなあと思う -たまに思う（↓4.7%）	担任のほかに分かってくれる 人-学校の友達（↓7.3%）
悩み-分からない（↓6.7%）	あなたをわかってくれる人 -分からない（↓8.1%）	将来の生活-今住んでいる所 （↓4.5%）	将来の進学-まだよく わから ない（↓7.0%）
家にいると-あまり楽しくない （↓5.3%）	友達という時に嫌な思い -あまりない（↓7.9%）	なんとなく大声を出したい （↓4.5%）	将来の生活 -わからない（↓7.0%）
友達という時に嫌な思い -たまにある（↓4.5%）	将来の進学-まだよくわから ない（↓7.8%）	悩み-体の健康（↓4.5%）	悩み-分からない（↓6.9%）
悩み-自分の見た目 （↓4.2%）	担任はいじめを注意するか -分からない（↓6.9%）	家族とどのくらい話すか -あまり話さない（↓4.5%）	学校に行きたくない -あまりない（↓6.0%）

3. 2 将来や進学に関する項目について

将来や進学に関する質問項目の分析結果を以下の図1、図2に示した。将来生活したい場所に関する質問項目では、将来どのような場所で生活したいかについてのアンケートを行った。その結果進級に伴い、今住んでいる所で生活したいという割合が減少し、県外や県内の他の市町村に住むことを考える割合が増えてくる傾向がみられた（図1）。こうした結果を踏まえると中学校で行うキャリア教育では地元の職業にこだわってはいは生徒の興味関心と合わないことも考えられる。より生徒の実態に即しながら学習を構成していくことも検討してよいのではないだろうか。このような結果はX市やA県の地域特性であるとも考えられる。A県よりも活力があり魅力的であると児童生徒が考える他の都道府県、市町村での調査であれば今住んでいる地域に住み続けたいと思う生徒の割合は減少しにくいことも想定される。各学校においてこうしたアンケート結果を基にキャリア教育の内容について再考することも可能であろう。

将来の進学先に関する質問項目については2年生から3年生に進級したタイミングで高校や大学への進学意識が高まっている傾向がみられた（図2）。「まだ分からない」を選択した生徒の割合について、男子は2年生から3年生への進級に伴い減少し、女子は2年生、3年生への進級に伴い減少していた。男女間での比較でみると男子よりも女子のほうが「専門学校」を選択する割合が多く、「まだ分からない」を選択する割合は少なかった。

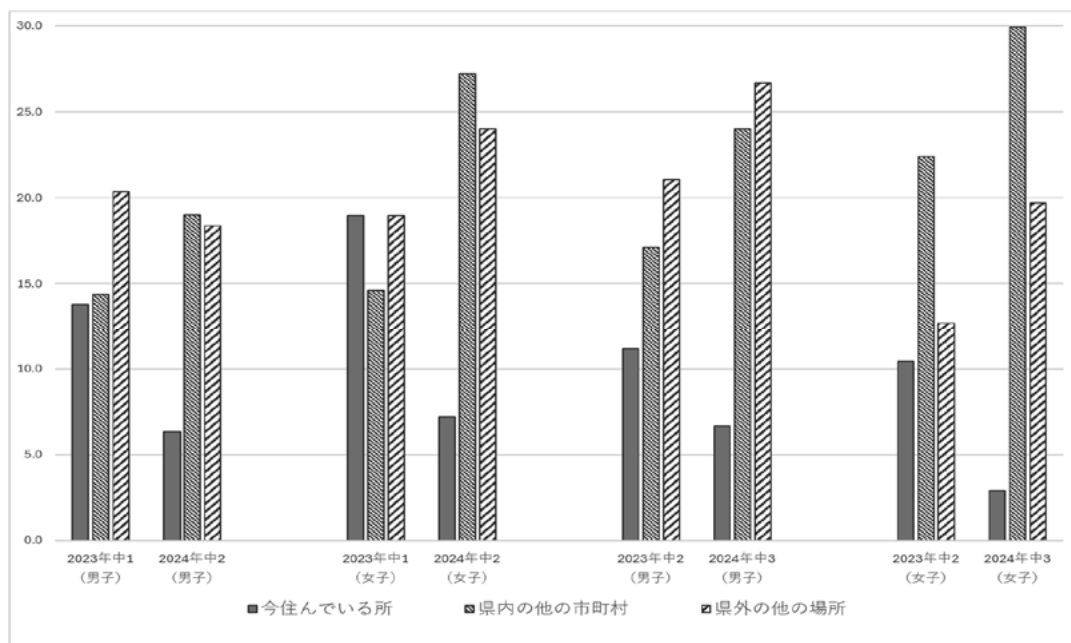


図1 将来生活したい場所に関する質問項目の結果

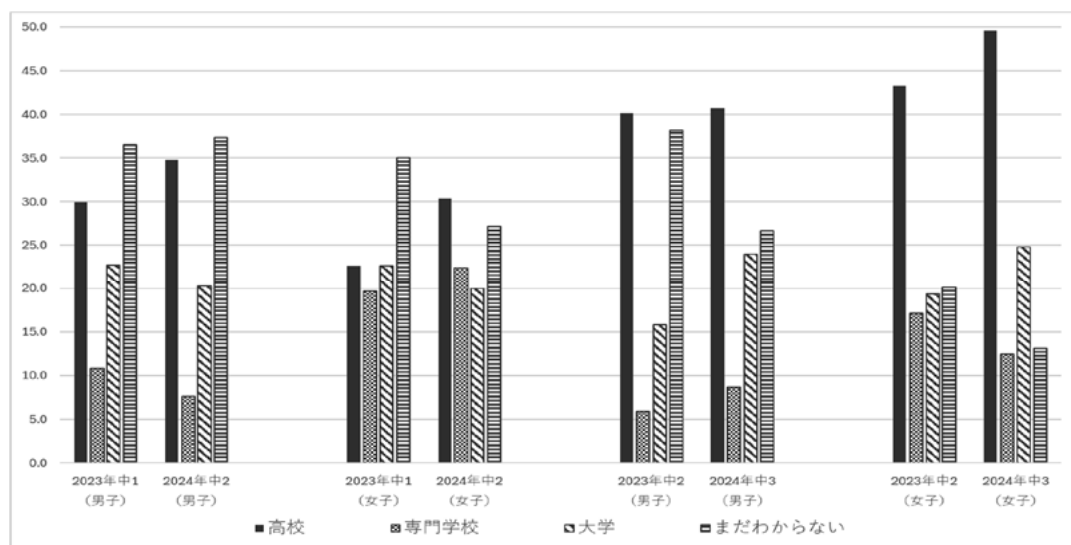


図2 将来の進学先に関する質問項目の結果

3. 3 悩みや不安感に関する項目について

現在の悩みについて尋ねた項目では、複数選択で回答できる形であったが、全体の大きな傾向は進級によって変わることはなかった。どの学年、性別においても勉強の成績や将来についての悩みが上位に来ていることがわかる（図3）。また、細かく下位項目を見ていくと男子よりも女子のほうが悩んでいる割合は多く、「悩みはない」を選択する割合についても男子のほうが多いという傾向がみられた。男子の悩みについて上位2項目以下を見ていくと、中学1年生男子が複数のことに悩んでいる様子がやや見られるもののその割合は低く、2年生、3年生になるとどの悩みも10%前後に収まっている。一方で女子の悩みに着目すると、友だちのことや自分の見た目に関する悩みは中学2年生の女子が一番悩んでいる割合が高い。「友達という時に嫌な思いをするか」について尋ねた項目の結果（図4）や「一人になりたいと思うこと」について尋ねた結果（図5）においても、中学2年生の女子は他の属性と比べて「よくある」「たまにある」を選択している割合がやや高くなる傾向がみられた。こうした複数の項目の比較から、中学2年生の女子生徒は生徒間の対人関係で一番悩みを抱えやすい時期であるといえる。

その一方で「学校へ行きたくないなあ」と思うことについて尋ねた項目の結果では属性による差はあまり見られず、学校への行きたくなさは特定の要因からくるものではなく複数の要因が積み重なり、あるいは一つの要因が大きくなりすぎることから感じるものであると考えられる（図6）。そうしたことから、各学校ではアンケートなどにより児童生徒の不安感や困り感を顕在化し、そうした悩みの解消に向けた働きかけなどを行っていくことが必要である。

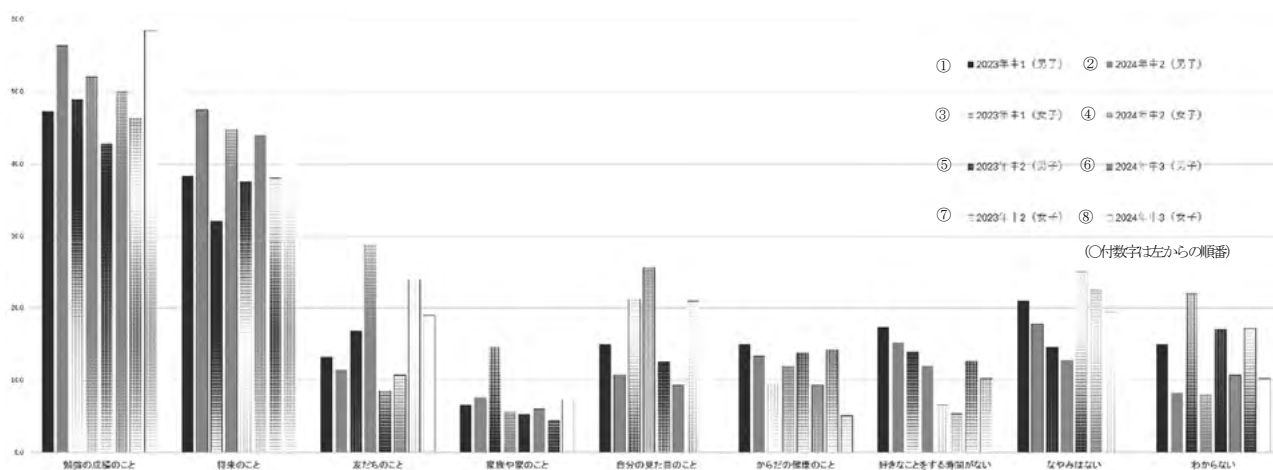


図3 悩みを抱えていること

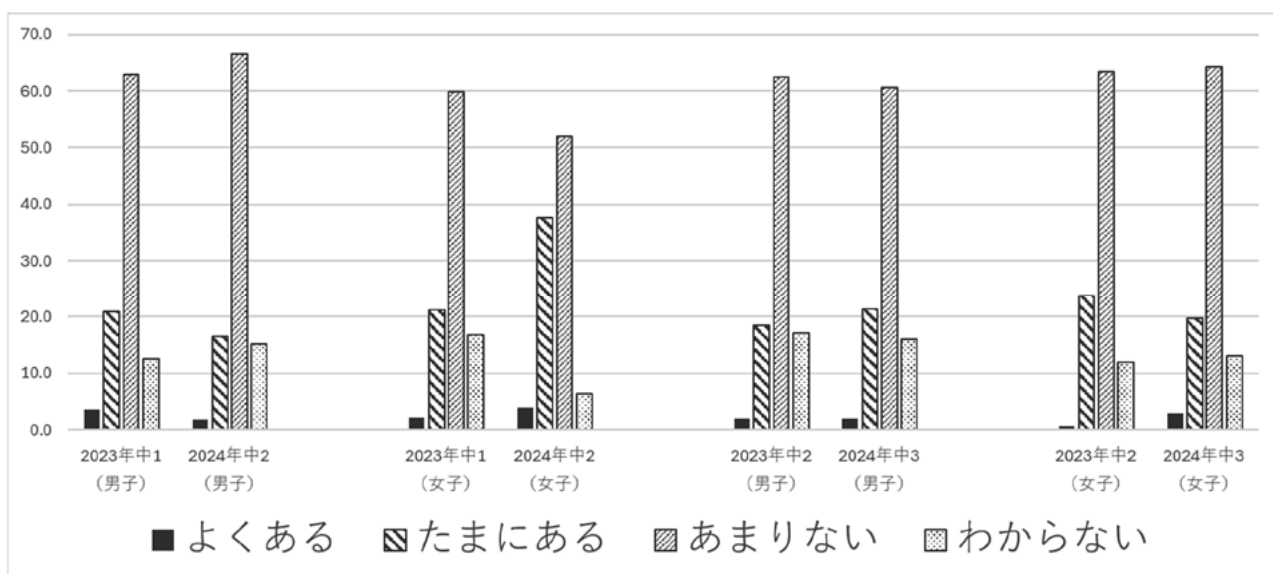


図4 友達という時に嫌な思いをすること

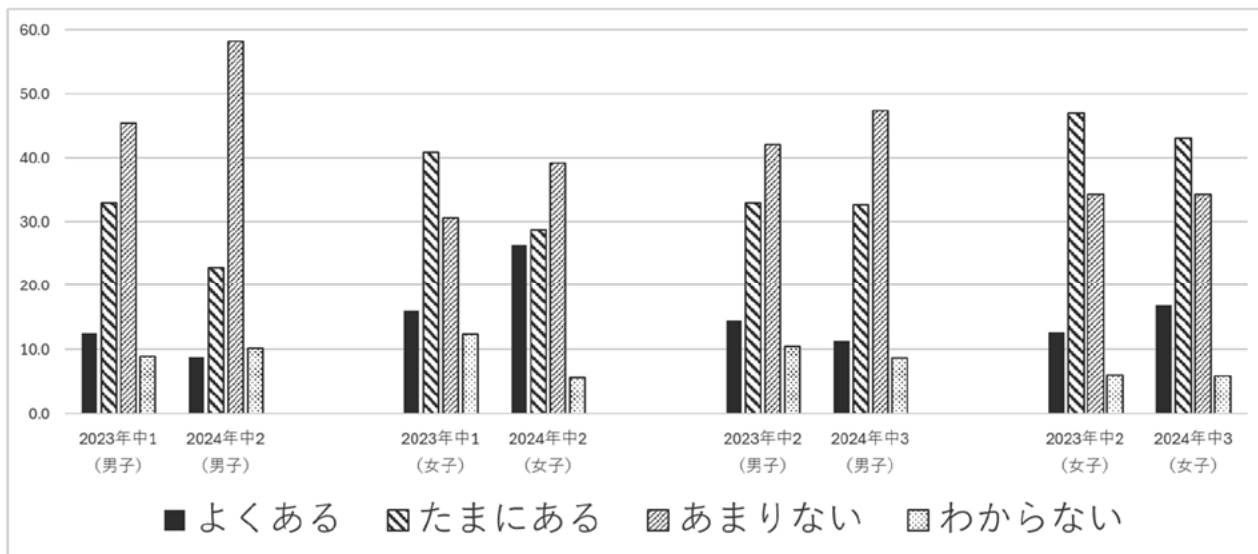


図5 一人になりたいと思うこと

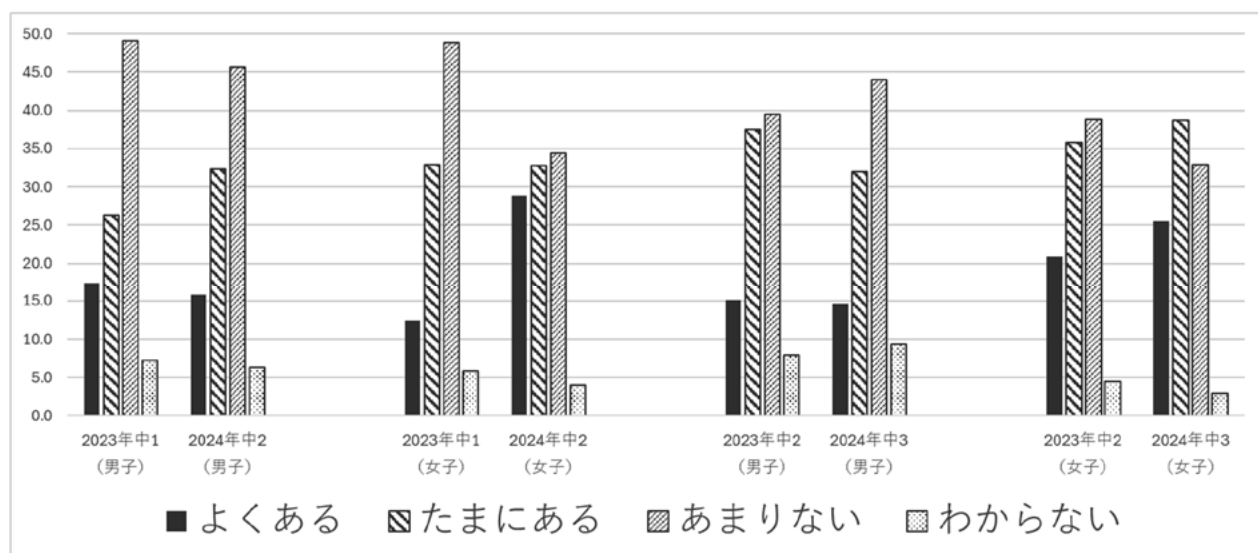


図6 学校に行きたくないなと思うこと

3. 4 家庭に関する項目について

家庭の満足感を訪ねた項目では、「家にいると楽しいか」についての結果（図7）と「家族とどのくらい話すか」についての結果（図8）のどちらも肯定的な回答をした生徒の割合が多いことが分かる。男女間比較でも、「家にいると楽しいか」については差は見られない。「家族とどのくらい話すか」については男子のほうが「よく話す」を選択する割合が女子に比べ少ないが、「たまに話す」を含めた割合では男女で差は見られなかった。

図3に示した悩みの項目の中でも家族や家庭に関する悩みは他の項目に比べ、選択した生徒の割合は少ない。家族との関係は良好であり、家庭での満足感が高い生徒が多く、一般的な反抗期の中学生として思い浮かべる生徒像とはまた少し異なった生徒像が浮かび上がってくるのではないと思われる。齊藤・青木（2021）はこのような結果と同様に、近年親子関係が変化してきており、子どものいわゆる反抗期にあたる時期の親子関係が良好であることを指摘している⁽⁷⁾。またこのほかにも近年の親子関係についてその様子が変化してきていることを指摘する研究は散見される。今回の結果もそれらの研究を支持する結果になるのではないかと考える。

その一方で、このような結果を楽観視するのではなく、一定数あまり家庭での満足感を感じられていない生徒がいるため、他の生徒とギャップのある生徒ほど家庭内での不安感や困り感を抱えている可能性を考えておく必要がある。また、家庭内での満足感が高いからこそ、学校へ行きたくないと感じる生徒が出てくることにも注意しなければならない。

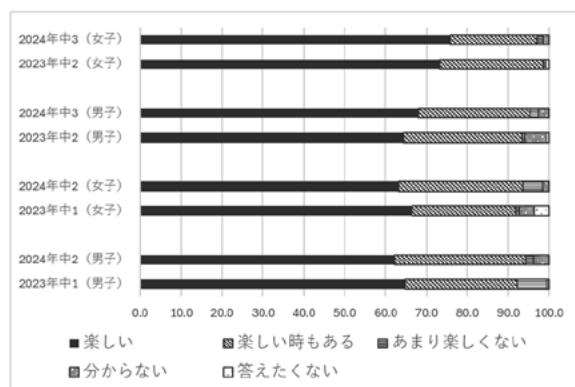


図7 家にいると楽しいか

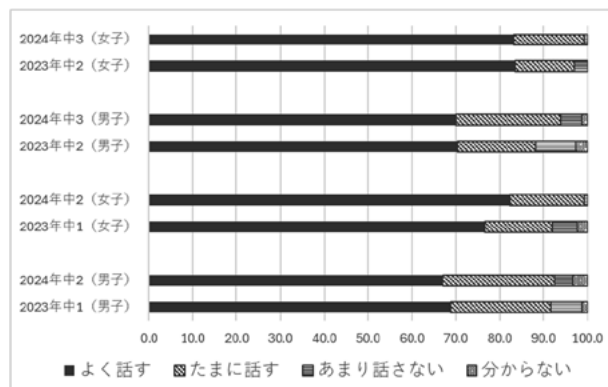


図8 家族とどのくらい話すか

4 全体考察と今後の課題

生活アンケートの分析により、当該地域に住む中学生について、進路意識や現在の悩み、家庭での満足感などの傾向を見出した。全体の傾向としてどの学年・性別においても、学校への行きたくなさや勉強の成績や将来への悩みを抱える生徒の割合が進級に伴い増加している。そういった結果と対称的に回答の中で「わからない」を選択する割合は進級に伴い減少している。悩みや不安感が増えていると捉えられる一方で、自身の中でうまく表現できていなかった悩みや不安感が言語化できるようになってきていると捉えることもできる。

進学や将来に対する回答はどの学年・性別においても回答率の変動が大きく、中学にとって進路に対する考え方や捉え方は変化しやすいものであるということが考えられる。将来の生活については今住んでいる所で生活したいという割合が減少し、県外や県内の他市町村に住むことを考える割合が増えており、キャリア教育の内容もこうした実態を踏まえ再考することもできる。進学意識については特に2年生から3年生に進級したタイミングで高校や大学への進学意識が高まっている傾向がみられた。

男女間の比較では、中学1年生の男子は複数のことに悩んでいる様子がやや見られるもののその割合は少なく、2、3年生ではどの悩みも選択されている割合は減少傾向にあった。「悩みはない」を選択している割合は女子に比べ男子の方が多く、その割合は進級に伴い減少し、勉強の成績や将来に対する悩みが進級に伴い増加するという傾向がみられた。進学に関する質問において、2年生から3年生への進級に伴い「わからない」を選択する生徒の割合が減少していた。

女子の結果では悩みに関する質問の回答で全体的に男子よりも選択している割合が多い傾向がみられた。特に中学1年生から中学2年生に上がった際に悩みが多くなり、学校生活に対する認識も大きく変化している可能性が示唆された。中学2年生では友達とのことや自分の見た目に関する悩みが他の学年・男子との比較でも多くなっており、友達という時に嫌な思いをすることや一人になりたいことに関する質問でも「ある」と回答する割合がやや高くなる傾向がみられた。こうした結果から中学2年生の女子は他の学年や性別と比較した際に対人関係で一番悩みを抱えやすい時期であるといえる。教育相談や生徒指導の実践においても中学2年生の女子生徒には特にこうした対人的な悩みがあることを踏まえておく必要がある。進学面については進級に伴い「わからない」を選択する割合は減少していき、男子よりも専門学校を選択する割合も多く、より広く長い期間進路について考えることができていく人の割合が多いといえる。

男女及び学年によって異なる項目がいくつかあるものの、学校へ行きたくないと思うかの項目についてはあまり差がなかった。学校への行きたくなさは特定の要因で測定できるものではなく、複数の要因が絡むものであることが再確認された。

家族に関する項目については肯定的な回答が性別・学年に関わらず多く、家庭生活には満足感の高い生徒が多いことが示唆された。これは近年の親子関係の変化に関する諸研究の結果とも一致するものであり、家庭に対する捉え方は改め直し、それによる学校生活の認識への影響についても今後再考が必要である。

今回は2年間の調査による傾向を見ていったが、2023年の中学2年生と2024年の中学2年生は全く別の集団であり、それらを比較することは進級による変化を調査するには適さない。そうしたことから、中学校3年間の変化を見ていくにはまだ調査が不十分である。本稿では触れなかったが生活アンケートでは授業や学校生活そのものにつ

いての回答も求めている。それらの回答も踏まえながらこれからも継続的に調査を続け、小学校での進級、小学校から中学校へ進学した際の認識の変化についても検討が必要である。質問項目については今回の分析でさらに必要だと考えられた項目をもとに精選していく。今回は統計的な処理を施してはいないが、今後は統計処理をし、進級による有意な変化を見出していく。

注

- 1) 上越教育大学いじめ・生徒指導研究研修センターは教育機関、学校及び地域社会と連携しながら、いじめや生徒指導等の学校教育の実践に関する諸課題に係る理論的・開発的研究を推進し、学校教育の改善、充実及び発展に寄与することを目的として、令和2年9月1日に「いじめ・生徒指導研究センター」として設置され、さらに、いじめ・不登校等生徒指導に関する組織の機能強化のため、令和6年4月1日付けで「いじめ・生徒指導研究研修センター」として発展的に改組・整備された⁽⁸⁾。
- 2) 本研究では、第1著者がデータの分析・考察を、第2著者がデータ収集及び問題と目的を担当している。

引用文献

- (1) 文部科学省 令和4年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要 pp.20-23
- (2) 文部科学省 生徒指導提要（令和4年）p.19
- (3) 文部科学省 「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策」（COCOLOプラン）p.7
- (4) 文部科学省 不登校・いじめ緊急対策パッケージ
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1397802_00006.htm（閲覧日：2024年8月27日）
- (5) 佐野、丁井、田村 「手書き作業とケータイ文字入力の脳活動の比較」, 2011, 『広島国際大学経営学論叢』, 4, pp.95-112
- (6) 小山尚輝, 高橋知己 「生活アンケートにみる中学生の意識変容」 第25回日本生徒指導学会鳴門大会, 2024年10月
- (7) 齊藤諒・青木真理 「思春期における第二反抗期に関する研究：第二反抗期のプロセスと親との葛藤に着目して」, 2021, 『福島大学人間発達文化学類附属学校臨床支援センター紀要』 4巻, pp.19-26
- (8) 上越教育大学 大学紹介 いじめ・生徒指導研究研修センター
https://www.juen.ac.jp/050about/020campus/001center_library/700rbgc.html（閲覧日：2024年8月27日）

The Effect of Promotion on the Junior High School Students' Perceptions of School Life.

Naoki KOYAMA* · Tomomi TAKAHASHI**

ABSTRACT

This paper presents the analysis of the actual situation of the students in the area based on the results of the questionnaire survey conducted by the Research and Training Center for Bullying and Student Guidance at Joetsu University of Education on the lives of approximately 1,160 students in X City, A Prefecture over a period of two years. The results showed that there was a significant change in the items related to the future and the students' dislike of going to school. Regarding items related to desired future career paths, it was confirmed that students in X city, A prefecture tended to move away from their hometowns as their grades increased, and that the percentage of students who had problems with their studies and career paths increased slightly even after moving on to the next grade. The awareness of going on to higher education was observed to change and increase at the timing of moving up from the second grade to the third grade. More girls than boys were worried about the general problems, with female students in the second year of the junior high school being more worried. The second year junior high school girls' worries about their friendships and appearance increased as they moved from the first grade to the second and decreased as they moved from the second grade to the third grade. As in recent research on the parent-child relationships, many respondents in all the grades of both genders, responded positively to the question about their family relationships, suggesting that they may be building good family relationships. The percentage of the students who chose "I do not know" decreased as they advanced to the next grade, suggesting that they were able to verbalize the internal aspects of their school life.

KEY WORDS:

school life questionnaire school refusal one device per person promotion gender difference

* Joetsu University of Education (Professional Degree Program) ** Research Center for Bullying-Prevention, Guidance and Counseling